

[112]語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/26934>

出版情報：語文研究. 112, 2011-12-26. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



《會員著書紹介》

小澤正明 著

『朱熹集註論語全訳』

本書は、朱子の『論語集註』の各篇について、筆者が昭和三十三年より逐次発表したものを、全篇、一冊に纏めたものである。目次は、以下の通り。

- 論語 序 説
- 論語 卷の一
 - 舉而第一篇
 - 爲政第二篇
- 論語 卷の二
 - 八佾第三篇
 - 里仁第四篇
- 論語 卷の三
 - 公冶長第五篇
 - 雍 也第六篇
- 論語 卷の四
 - 述而第七篇
 - 泰伯第八篇
- 論語 卷の五

- 子罕第九篇
- 郷黨第十篇
- 論語 卷の六
 - 先進第十一篇
 - 顔淵第十二篇
- 論語 卷の七
 - 子路第十三篇
 - 憲問第十四篇
- 論語 卷の八
 - 衛靈公第十五篇
 - 季氏第十六篇
- 論語 卷の九
 - 陽貨第十七篇
 - 微子第十八篇
- 論語 卷の十
 - 子張第十九篇
 - 堯曰第二十篇
- あとがき

本書の最も大きな特徴は、本文も朱子の註も、原典に在る字を一字たりとも外すことなく訳文に表わす、つまり「逐語訳」した所にある。また、普段あまり目にしない難しい漢字や現代とは読みが違ふ漢字には、ルビがつけられ、括弧づき

で簡単な解釈まで施されているため、辞書を片手にせずとも読み進めることができる。訳文は、的確かつ柔軟で、「朱熹集註論語」の研究書としては勿論、論語に関する一般教養書としても、十分に楽しめる一冊と言えよう。

(昭和六十三年 白帝社 三九九頁 A5判 二、九〇〇円)

小澤正明 著

『川端康成文芸の世界』

本書では川端康成の作品を取り上げ、そこから見えてくる川端文芸の精神を述べている。筆者によれば、これまで語られてきた「作家論」は親である作家とその子である作品とを同一視するもので、作品から作家の人間像を捉えるものであった。しかし親と子が人格の違う個人であるように作家と作品とは別物であるため、作品を通して作家の人間像を捉えようとする「作家論」は肯定できないとする。そこで芸術主体である作家の人間性を作品から探ろうとする作家論を否定し、作品そのものの鑑賞によって川端文芸にみられる性質を明らかにすることを試みたものが本書である。目次は以下の通り。

序章

第一章 川端文芸に於ける「新感覚派」的感受性(其の一)

——「叙情歌」研究——

第二章 川端文芸に於ける「新感覚派」的感受性(其の二)

——「水晶幻想」研究——

第三章 川端文芸に於ける情緒性

——「千羽鶴」研究——

第四章 川端文芸における短編的発想法

——「招魂祭一景」研究——

第五章 抒情性の展開

——「伊豆の踊子」研究——

第六章 人間性の純粹化

——「雪國」研究——

第七章 日本浪漫性の昇華

——「山の音」研究——

第八章 川端文芸の特異性とその体系

序章では「文学」、「文芸」の有様を探り、作家とは独立した作品の文芸性を探る作品論こそ文芸性探究の正当な姿であると説く。「作品が誕生した時、思想は形象化されて思想性となり、感情・感覚は形象化されて情緒性・感受性となって文芸性を形造っている。」(本書二九頁)と述べ、作品中に形成された文芸性を対象とした「作品論」が文芸学の基本的な方法

であるとす。

第一章から第七章までは個別の作品から読み取れる川端文芸の精神を様々な側面から探る。各々の作品の構成や叙景表現、用語について詳細な考察がなされている。

第八章では第七章までの考察をふまえ、川端文学における感受性、思想性、情緒性といった要素の繋がりを川端文学の特異性として体系付ける。

「文芸性の基盤は人間性に在り、文芸性の本質は芸術性に在る。」(本書一九四頁)。文芸の芸術性、文芸性は感受性、思想性、情緒性と別個に存在するのではなく、それらが一個の作品中に統合された形で存在する。文芸作品とはその融和した世界全体のことを指している。つまり川端文芸の特異性は感受性、思想性、情緒性の特異性であるといえる。本書では川端文芸について各作品の持つ特色に着目し、それを「作家川端康成の人間像」ではなく、「川端康成文芸の世界」に帰納する試みがなされている。

(昭和五十五年三月 桜楓社 A5版 二〇一頁 三、八〇〇円)

板坂耀子 著

『江戸の紀行文 泰平の世の旅人たち』

本書は、江戸時代の多様な紀行文について、以下の三つを要点として書かれている。まず、これまで「つまらない」「文学的に価値がない」と考えられていた江戸の紀行文は「面白い」のだということ。次に、その面白さを支えているのが、中世までとは異なり、感傷的にならない前向きな江戸の旅人像や、豊かな情報、そして既成の様式によりかからない正確で明快な表現だということ。最後に、江戸の紀行文の代表作は、松尾芭蕉の『おくのほそ道』ではなく、初期の貝原益軒の『木曾路記』、中期の橘南谿『東西遊記』、後期の小津久足の『陸奥日記』だということである。

目次は以下の通り。

はじめに

第一章 『おくのほそ道』は名作か？

第二章 林羅山と名所記 『丙辰紀行』を読む

第三章 石出吉深と寺社縁起 『所歴日記』を読む

第四章 貝原益軒と博物学 『木曾路記』『南遊紀事』を読む

第五章 本居宣長と古典文学 『菅笠日記』を読む

第六章 橘南谿と奇談 『東西遊記』を読む

第七章 古川古松軒と蝦夷紀行『東遊雜記』を読む

第八章 土屋斐子と女流紀行『和泉日記』を読む

第九章 東海道の紀行はなぜつまらないのか？

第十章 小津久足と旅心 『青葉日記』を読む

終章 その後の紀行——幕末から明治へ

あとがき

江戸時代の紀行に関する基本的な文献

二千五百点を超えて現存する作品の大半が、いまだ活字に
さえなっていないという現状で、著名な作者以外にも、近世
の紀行文においては重要な作者とその作品を紹介している点
は有益である。また、それぞれの作品に行程図を付している
点も興味深い。コラムでは、活字化されている江戸の紀行文、
和書の扱い方、変体仮名の読み方などが紹介されている。読
者が文学の研究者でなくても、堅苦しさを感じることなく、
江戸時代の和書を身近に思えるような、読みやすい一冊であ
る。

(平成二十三年一月 中央公論新社 B6判 三〇七頁 八八〇円)